

詩編に親しむ

2019年5月19日(日) 奈良基督教会
講話・司祭 井田 泉

聖歌 44 聖なる主のうるわしさと

開会の祈り

I 詩編第27編 主のうるわしさ

・聖歌44には1節「聖なる主のうるわしさ」、3節「主のまことの美しさ」が歌われる。

明示されてはいないが、この根拠(典拠)は詩編第27編にあると思われる。

【祈祷書から】

詩編第27編(1-11, 17-18) 交唱

- 司式者 1 主はわたしの光、わたしの救い、わたしはだれをも恐れぬ || 主はわたしの命の砦、わたしはだれをはばかる
- 会衆 2 わたしの肉を食い尽くそうと悪を行う者が襲いかかっても || わたしの敵はつまずき倒れる
- 司式者 3 たとえ軍勢がわたしに向かって陣を敷いても || わたしの心は恐れぬ
- 会衆 4 たとえ戦いを挑んできても、戦いが間近に迫ってきても || わたしは信頼してひるむことがない
- 司式者 5 わたしは主に一つのことを願い求める || 生涯、主の家を住まいとし
- 会衆 6 主の麗しさを仰ぎ見て || 主の宮で思うことを
- 司式者 7 悩みの日には神はわたしを幕屋のうちに潜ませ || 天幕の隠れ場にかくまい、岩の上に立たせてくださる
- 会衆 8 わたしを囲む敵の上に || 神はわたしの頭を高く挙げてくださる
- 司式者 9 喜びに溢れて幕屋でいけにえを献げ || 主をたたえて歌おう
- 会衆 10 主よ、わたしが呼ぶとき、わたしの声に聞き || わたしを憐れみ、こたえてください
- 司式者 11 わたしの心は言う「神の顔を求めよ」と || 神よ、あなたの顔をわたしは慕い求めます
- 会衆 17 わたしは堅く信じます || 神に生きる人々の中で、神の美しさを仰ぎ見ることを
- 司式者 18 主を待ち望め || 心を強くして主を待ち望め
- 一同 栄光は || 父と子と聖霊に
初めのように、今も || 世々に限りなく アーメン

- ・神のうるわしさを聖歌から、そして聖書の詩編から知ること、感じることは幸せなこと。
- ・神は美しい。愛の美しさ、聖なる美しさ。地上にはない、天からの美しさ——実はこれをわたしたちは聖餐式で与えられている。(聖別されたぶどう酒のこの上ない美しさの発見)

Ⅱ わたしと詩編

1. 詩編に関心がなかった時期

2. 詩編に関心が起こり始めた時期 (日本聖書協会口語訳)

中学 高校? 悩みや病気から?

詩編の祈りが自分に響きはじめる。詩編の中に自分の思いを聞くようになる。学生時代

3. 詩編に魂の救いを求める 神学生時代 (文語祈禱書)

第 77 編～ 個人的経験「聖書と私の出会い——私の前半生」から

「時折、非常な不安と焦燥感が襲ってきて、じっとしていられなくなる。ある晩、そのような状態にまた襲われたとき、救いを求めて祈禱書(当時は文語)を取り、巻末の詩編を開いて声を出して読み始めた。偶然に開いたのは第 77 編であった。当時の文語で引用する。

「われ声をあげて神によばわん || われ声を神にあげなば聞きたまわん

われ悩みの日に主をたずね、夜わが手をのべてたゆむことなかりき || わが魂は慰めらるるをこばみたり」 77:1-2

激しい悩みのとき、この詩人は慰められるのを拒んだという。そうだと思った。安易な慰めは助けにならない。そのとき、声を出して詩編 77 編から読み出して、1 時間以上読んだだろうか。読み疲れた。けれども詩編は、神を見失った者にも支えを与えてくれるように感じた。」

※なおこの 77 編は 78 編に続いていき、先祖の時代における神の働きを回想していく。

「私の経験」にはない「他者の神経験」(聖書とキリスト教の歴史における信仰の証言)が私の課題となる。

4. 詩編を頼りにする 神学校教師時代 (新共同訳)

出張の途中、聖書を忘れたことに気づき、途中下車して詩編付きの新約聖書を購入する。

詩編を身近に持たないことの不安(恐怖に近いもの)。

詩編が傍らにあることの安心感。わたしを支え守る祈り、わたしの祈りがともにある。

5. 毎日必ず詩編を読む 信仰の呼吸が深まっていく

朝の聖書日課から一言を心にとめ、ノートに書き留める。圧倒的に詩編が多い。

Ⅲ 詩編の概略

1. 詩編は旧約聖書全 39 卷のひとつ。信仰の詩集。祈りの書。
「聖書の中の祈祷書」(ボンヘッファー)
2. 旧約聖書は大きく「律法」(最初の 5 書)、「預言者」、「諸書」に分けられる。
詩編は諸書に含まれる。
3. 詩編は全部で 150 編からなる。すべてダビデによると言い伝えられてきたが、実際のダビデの作品は一部であり、前 1000 年から前 200 年に創作・編集されたとされる。
「ヘブライ語の書名は『テヒッリム』で、『賛美の歌』の意味。ギリシア語は『プサイモイ』で、『(弦楽器の伴奏つきの) 歌』を意味し、礼拝における朗唱に楽器を伴ったことを暗示している(詩 150 : 1-6 を参照)。」(新共同訳聖書辞典)
4. 大きく五つに分類される
第 1 卷 (1-41 篇)、第 2 卷 (42-72 篇)、第 3 卷 (73-89 篇)、第 4 卷 (90-106 篇)、
第 5 卷 (107-150 篇)。
各巻の終わりに頌栄とアーメンが付加されている(第 5 巻の終わりは「ハレルヤ」)。
5. 聖公会は当初から詩編を重んじ、祈祷書の中に詩編を組み込んだ。現在も各国の祈祷書には詩編が収められている。
6. 詩編の中には、感謝、賛美、願いのほか、嘆き、迷い、問い、訴えなど、さまざまな人びとの魂の声が響いている。これに繰り返し触れるうちに、わたし自身の思いに響きあうものがここにあることを発見する。また、わたしの思いではなくても、ほかの人の祈り(神へのまごころの表出)として大切に耳を傾けるようにする。
7. 詩編の中でイエス・キリストが祈っておられる。
8. やがて詩編はわたしたちの人生の支えとなり、かけがえのない友となってくれる。
9. 詩編の祈りをまねる。詩編の言葉に影響される。自分の中に蓄えられてくる。
詩編に親しみ、詩編とともに祈ることを重ねるうちに、自分自身の言葉で祈ることが豊かに可能となる。

IV カトリック典礼聖歌（詩編）から

♪詩編 119:1,105（祈禱書参照） [75 神よ、あなたの言葉は]

♪詩編 130:6,1（祈禱書参照） [118 主は豊かなあがないに満ち]

VI 沈黙と分かち合い

・詩編 27 編をそれぞれ読み、心にとまったひとつの節を書き写してみましよう。

（決まらない場合は、最初の節にしてもよい）

・数人ずつになって、それぞれがどこを選んだかを分かち合ってみましよう。

結び

詩編第 27 編

祈り

聖歌 44 聖なる主のうるわしさと